

クマケムシ

よく晴れた日、毛むくじらの毛虫が舗装道路をひたひたと急ぐ姿を見かけた人は多いでしょう。このけむしは「クマケムシ」といわれ、「春先」にウロウロしているのは食草探し、「晩秋」にウロウロしているのは暖かな越冬場所を探しているわけです。

「クマケムシ」は「[ヒトリガ](#)」(ウィキペディア)の幼虫ですが、人家の庭や公園などでも比較的好く見かけます。産卵期は7月で、薄青白い卵は成虫に比較してかなり大きいのが特徴です。メスはどこにでも構わず産卵する傾向があります。幼虫は8月に孵化し、終齢期には体長 60mm 程度まで成長します。

赤茶色の長い柔毛に覆われており(写真1.)、まさに「けむし」そのものです。「クマケムシ」は、広食性であり多種多様な草本、低高木の葉を食べ、エサを求めて地上を積極的に移動します。幼虫のまま落ち葉の下などで越冬し、翌年の6月から7月までに蛹化します。したがって、良く見かけるのは春先の6月頃と晩秋の11月頃で、成虫は7月から8月までに羽化します。

成虫(ヒトリガ)は他の多くの蛾と同様夜行性であり、火の周囲を渦を描くように飛びまわるのをよく見かけます。この習性は特に本種に限ったものではなく、他の蛾や昆虫で普遍的に見られるのです、特に本種において目立ちます。

昔はローソクや焚き火などにやってきて、最終的には火に飛び込んで自ら焼け死ぬことになり、和名の「ヒトリガ」(「火取蛾」、「一人蛾」ではない)もここに由来します。また自らを滅ぼすような禍の中に進んで身を投じたり、みすみす敵の餌食になる行為を指す「飛んで火に入る夏の虫」ということわざも、本種のような蛾が見せるこうした習性から生まれたものです。

この「クマケムシ」もうっかり油断をすると、寄生性の「ハエ」がやって来て、体内に卵を産み付けられてしまいます。産み付けられた卵が孵ると、「ハエ」の幼虫はケムシの体を食べて成長し、やがて腹を食い破って外に出てきます。そうなると「クマケムシ」は確実に死んでしまいます。もし寄生された場合、「クマケムシ」はやられっぱなしなのでしょうか。

実はそうでもないのです。最近のアリゾナ大学の研究によると、「クマケムシ」も自己防衛するということが分かってきたのです。それは、ハエの幼虫に寄生された「クマケムシ」は、アルカロイドを含む草を沢山食べて、体の中にアルカロイドを一杯溜めて、寄生虫を駆除するというのです。

アルカロイドというのは、タバコの「ニコチン」やお茶の「カフェイン」、ケシの「モルヒネ」などです。

ところで、麻薬には大雑把に分けて3種類あるのを、皆さんご存知ですか。

1. ケシの花から取る「モルヒネ」、「コカイン」、「アヘン」、「ヘロイン」など。
2. 「大麻」取られる「マリファナ」。
3. 「エフェドリン」という化学物質を原料として、工業的に作られる「覚せい剤」です。

アメリカでは、中流以上の高所得者は「コカイン」を、中以下の低所得者は「マリファナ」だそうですが、自分自身の苦境を健全に乗り切るには、強い意志、倫理観、他人への愛情、子孫への責任など、私たちが長い間「徳」として築き上げてきたものへの回帰や強化しかありませんね。

雑談はこの位にして、このうち、「クマケムシ」たちの身近にあるのが1. というわけです。

これまで、自己防衛をするのは、学習能力のあるチンパンジーのような比較的知能の高い動物に限られるとされてきましたが、虫も自己防衛するものがあることが分かってきました。ただし、虫の場合、それは脳の働きではなく、ハエの幼虫に寄生されることによって味覚に変化が起こり、アルカロイドを含む草を食べようになるのだらうとも言われています。

その他、「クマケムシ」は長期天気予報を行います。長期予報を行うのは人間ばかりではないのです。動物、特に昆虫の中にはかなり正確な予報をされると言われているものがあります。「クマケムシ」も予報が出来る虫の仲間です。道路をすばやい動きで横断する毛虫がいたら、「クマケムシ」である可能性が高いですよ。「クマケムシ」を発見したら、背中茶色の縞模様をチェックしてみましょう。この縞が太いと「寒い冬になる」可能性が高いと言われています。

実は、「クマケムシ」の茶色い帯についてはニューヨーク自然博物館のC. H. カランが1947～1951年にわたって「クマケムシ」の茶色い帯の太さを観察し、「クマケムシ」の茶色い帯の幅が広いと、その年の冬は厳しくなるという迷信を、観察から事実であるということを見つけ、当時の気象予報より正確であったと報告しています。



写真1. 舗装道路を横断するクマケムシ(2009. 5. 10)

写真1. の「クマケムシ」の背中茶色のところが「細い」ところを見ると、2009年から2010年にかけての冬は暖冬かもしれませんね。

また、カマキリの「卵のう」から雪の量を予測できるという話もあります。カマキリは、雪に埋もれないように産卵するために、卵が高い場所にあるほどその冬は積雪量が多くなるというのです。このように、昆虫たちにとっては、「どんな冬になるか」はまさに死活問題です。長い進化の過程で「予報能力」を身につけたと考えても不思議はありません。もしかしたら、身の回りの生き物の中には、すばらしい予報士がもっともっと隠れているかも知れませんね。

さて、写真2. を見て下さい。「クマケムシ」が草の茎に登ったままミイラになっています。フィールドではこのように「バッタ」、「カミキリムシ」、「ハスモンヨトウ」などが、バッタであれば茶色いミイラに、また「ハスモンヨトウ」、「チューレンジハバチ」あるいは「セミ」などでは茎の先や木の枝で真っ白に燃え尽きているのを良く見かけます。

これらはいずれも、糸状菌が感染したもので、糸状菌がこれらの昆虫の行動を制御して、自分達の胞子が遠くに届くように茎に登らせたと言われています。これらの菌は大量発生する昆虫たちには感染率が高いようで選択性があるようです。庭や家庭菜園で見つけた時は、気持ちが悪くなるなど処理してしまわないで、そのままにしておくと自然殺虫剤になります。安全性も認められており、生物農薬としても期待されている菌類なのです。



写真2. 「クマケムシ」のミイラ
